小野寺　喜一郎　遊佐町長

新春座談会
農業と教育、環境と教育を考える

教育は100年の大計といわれます。
2000年を迎えてこれからの遊佐町の教育について、
話し合っていただきました。

■出席者
司会　渡邊　宗谷さん
パネラー　高橋　石雄さん
　　阿部　玲子さん
　　小野寺喜一郎　遊佐町長

豊かな自然を活かす

司会　今日はお忙しいところありがとうございます。これから、農業と教育、環境と教育というテーマで話し合ってまいりたいと思います。平成12年から教育指導要領が変わって、小学校3年以上では、総合学習が導入されます。中学校では、来年から動いていきます。時間数にすると、国語、算数に次いで3番目の時間数となっています。総合学習は町の、地域と一体となった教育を遊佐町の豊かな自然を活かすために何が必要か、まず町長さんからお願いします。

町長　今までいろいろ言われてきたことは、近代化を進める中で、いろいろなモノを得ることが、幸せにつながるものと思ってきた。しかし今、何が人間にとって真の豊かさなのか、アルビン・トフラーは「第三の波」の中で生命との関わりというのが、大事になってくると述べています。とすると、一人間らしく生きるためにも、自然を活かす、生命と向き合う取り組みがまだまだ弱い。それをもっと、もっと発展させていかなくてはならないと考えています。

司会　最近、「いじめ」「お受験」と悲惨なニュースが相次いでいます。生命の尊さや生命の絶たれる瞬間の体験が希薄になっているように思います。

教育は「地域・家庭」と「学校」の2つに大別されるように思いますが、「地域・家庭」の教育力の低下が指摘されています。それを補うために、総合学習が導入されたのではないでしょうか。高橋さんは遊佐自然文化学校の学長ですが、その活動を紹介していただけますか。

高橋　遊佐自然文化学校に入る前に「自然随順」ということについて話したいと思います。いくら、科学が発達しても四季の移り、喧雨は自由にできないし、自然の力に従わなければならないという意味です。

遊佐自然文化学校は自然とふれあう「遊び」の中から自然とのつきあいかたを学び、遊び名人を育てていこうということでやっています。

基本的には「わくわく農業」など5コースに分かれて、自然を知る遊びをしています。その他、今年度は東北植物研究会という大人の大会に参加して、一緒に滝の小屋まで行って鳥海山の植物のことについて学びました。半日かけて、牛渡川や丸池様を散策して詩を作り詩人のねじめ正一さんの指導を受けながら朗読するということもしました。また、西浜のキャンプ場に松苗を植えました。いつでも、自分が植えた松を見に行くように話しています。体験から遊佐を見直していく。今年のテーマは「自然が見える心を育てる」ということでやりました。

鳥海自然文化館「遊楽里」
イマジネーションギャラリー

自然のつきあい方を学ぶ

司会　いいテーマですね。自然の流れを変えることはできない。その意味で農業は自然に沿った仕事だと思います。

阿部　農業をするお嫁さんは少なくなっていますが、私は生きる源を作るものとして、誇りを持って取り組んでいきました。若い子たちはたいへんだといいますが、すごく楽しいことでもあるんです。種を蒔いて育て、そして次の種を得る。収穫した物を食卓に並べる。それは、とてもうれしいことです。

また、自分たちが食べておいしいものを道の駅「鳥海ふらっと」で販売しているとお客さんが喜んでくれ、とてもうれしくなります。夏の稲の葉が、風によりサワサワと音がするのを感じたり、稲の花が咲くところを見たり、そんな事を知ると、お米のおいしさは倍増します。農業の良さをもっとたくさんの人に知って欲しいですね。

私は3人の子どもがいますが、じゃがいも掘りはみんなでしました。そして、それを家で蒸かして食べる。汗を流した後の、じゃがいもはとても、おいしい。今の子どもたちにそういう体験が必要なのだと思います。

司会
渡邊　宗谷さん（杉沢南）
昭和32年生まれ。蕨岡小学校PTA会長。会社員（コンピュータ一関連業務）の傍ら農作業に従事。趣味はつり、植物いじり。1女2男の父。蕨岡剣道スポーツ少年団の指導員

司会　年代的に私たちは農業体験を経験した世代ですから、よくわかります。青年団の代表として、活躍された町長はあなの若者をどう見ますか。

町長　戦争が終わって、生きていくことは常に飢えとの戦いでした。我々は飢えをしのぐために、がんばってきたんだと思います。同時にずっと都市に対する憧れを持ち、もう一方で地域に残った自分たちは、自分の楽しさを作っていかざるを得なかった。貧しい時代は、結構目的・目標が明確だったのだと思う。社会が成熟するに従って目的が見えなくなってきた。世界11ケ国で6年毎に行っている世界青年意識調査を見ると、各国で「自由に暮らしたい」が一番であるが、とりわけ日本の青年で目立つのは、2番目の「経済的に豊かになりたい」ということ。今だって多くのものを持っているのに、もっと経済的に豊かになりたい。これは「モノ」に対して満足している時間が短くなった。つまり、それが、豊かさの中の貧しさでは

ないか。目標が見えなくなり、薄くなっている。自分にとって何が大切なのかが見えずらくなってきており、だから物量に走り、ますます人間が見えなくなってきた。

地方を再評価

司会　地方の持っているものを再評価すべき時期なのでしょうね。今までは一生懸命「都会の子ども」を作ってきたのかも知れませんね。

町長　そう、画一、均一な社会を作ること、都市並みの文化的生活を標榜し、求めてきた。しかし、本当に全て都市並みが豊かなのかどうか、幸せなのかどうか考えなくてはならない。

司会　蔵岡小学校では、白井自然の家で4泊5日の通学合宿を行いました。前段で、子どもの活動を支援する組織を作り、40人から50人が登録して協力しています。将来的にはその人たちが中心となって、活動を続けていければいいのですが。でも、不安はありました。終わったからといっても、子どもたちに外見上、何が変わったということはないのですが、校長先生いわく「たくましくなった」ということです。親の子離れ、子の親離れが必要ということでしょうか。

　遊佐自然文化学校はいかがですか。

高橋　健　全な青少年の育成の原点は30数年前からいわれているように「家や学校で得難い体験をさせる」ということだったが、それを具現化してこなかったのです。それは、自然の恩恵にふれ、自然に親しむ心や、自然への感謝を培うことです。自然の中で自ら実践することによって創造性が大きくなっていくような感じがします。

　遊佐自然文化学校だけでなく、地区公民館も地域の青年たちの指導によって青少年活動が行われてきました。公民館は公民館の目的に沿って、事業を行ってきたわけで、それは、学社連携、今は学社融合が展開されようとしていますが、公民館への支援、学校に対する支援をしてくれる地域の人を求めていく必要があります。先生方ができないことを地域のその道のプロの人に指導してもらえばいいわけです。

　遊佐自然文化学校では、自分たちでそばの種を蒔き、草取りをして、収穫して打ち、食べて収穫の悦びを味わいました。

司会　自然を大切にすることは、不自由を体験することなのかも知れません。野菜一つ作るにしても農業には、夢がありますね。それを子どもたちにどう伝えていくか。そこのところ阿部さんどうでしょう。

阿部　農業を押しつけることはありません。でも、食を支える農業の大切さは生活の中で伝えていきたいと心がけています。

　たいへんだけど、夕食などはできるだけ手作りのものを作るようにしていますし、その季節の味を大事にしています。一年中、きゅうりやトマトがスーパーに並ぶのは異常です。また、農業の安全性についても疑問です。虫も食べないものは、家族にも食べさせられません。不自然なものを作らない事が、遊佐町の農業の基本だと思って作物を作っています。石けん運動やリサイクル運動を通して遊佐町の自然を守っていく。今、この時を大事にすることが子どもたちの未来につながっていくのだと思います。

町長　わが国の人口と食料に対し、古くには、米一石、人一人といわれてきました。しかし、貧しい人々はアワ・ヒエなどの雑穀が主食で、正月やお盆に白い米にありつけるかどうか、そうした飢えの現状は戦後まで続いてきた。そこからの開放、農作業などの重労働からの開放がついこの前までの課題だったのだと思います。そして、近代化の基、利便性、大量生産をめざすことがいいことだったわけです。しかし、今日その価値が大きく変化してきた。食して大丈夫なのか、という安全性やあの人が作っているからという安心、そして味を含めての本物が、今、求められているのであり、これまでの単に市場で高いからという食料生産から、安全・安心・本物に価値が変わってきた。

　農業は生命と関わって学ぶことができる職業です。いろいろな形態の農業があってもいいんじゃないかと思います。農業は、全ての人たちが生命と多面的に関われる産業です。子どもはもちろん、高齢者の人も含めて、いろいろな人たちが農業を通し、生命と関わって欲しいと思います。必ずしも大量生産ではなくて、少量多品目も必要です。つまり、それが多様性なのです。遊佐町の多様性をいかに活かしていくか。そうして、本物の個性ある地域農業を確立していきたいものです。

阿部　「ふらっと」では、この人のこの作物がいいということで探して買っていく人もいます。お客さんの中には、ここに来ると楽しいという人もいます。

町長　そうですね。生産者一人ひとりが見える。自分の存在があるそれが重要だと思います。町民主役の町づくり

遊佐町教育委員会教育委員長
髙橋　石雄さん（八日町）

昭和9年生まれ。教育委員を5期（17年目）、教育委員長は3期（9年目）を迎える。遊佐自然文化学校学長、三崎公園の旧道の復元に携わる「歩歩歩（さんぽ）」の会1の会員を務めるなどボランティア活動にも積極的に参加。

百聞は一見に如かず

県立遊佐高等学校のインターンシップ（教職員の職場体験）

県立遊佐高等学校校長
宮澤　勝男さん

「百聞は一見に如かず」といいますが、生徒の就職を指導する上で先生が生徒の地域の仕事について知らなくては、指導できないのではと、今年度からインターンシップ（教職員の職場体験）を実施することにしました。

例えば、工場ではシャツを出しているようなだらしない服装は機械に巻き込まれるなど事故の原因になるため、とても危険です。なぜ、そうしなければならないか、その必然性を実感し、社会とプライベートのけじめを知って学んでもらいたい。

生徒は先生の背中を見て育っていきます。従って短い時間ですが、先生方にもものすごいスピードで動いている会社の現場を肌で感じてもらって、それを指導に生かして欲しいのです。会社の考え方や卒業生がどんな仕事をしていて、どんな悩みを抱えているかなどを一緒に働きながら、感じて欲しいと思います。

地域に根ざした高校である遊佐高は、もっと地域に開かれていかなければならないのです。地域にとって魅力のある学校になるための第一歩だと考えています。

遊びの名人を誕生させたい

遊佐自然文化学校

西浜キャンプ場に松を植える

平成10年4月にオープンした鳥海自然文化館「遊楽里」のイマジネーションギャラリーにある、大きな本、遊佐アルバム。

この本の製作にかかわった指導者が中心になって、平成11年に遊佐自然文化学校（学長　高橋石雄）が始まりました。

自然とのふれあいの中から名人を誕生させたいとの願いをこめて5コースを開講中。

「魚と遊ぼう」「木や草花と遊ぼう」「鳥海山の自然と遊ぼう」「わくわく農業と遊ぼう」「遊佐の遊びと祭りで遊ぼう」の5コースに町内の各小学校から約40人が参加して、遊佐町をフィールドに活動しています。

遊佐町長
小野寺　喜一郎

昭和21年生まれ。県立農業講習所を卒業し、農業改良普及員資格を取得。その後就農。県連合青年団団長を経て、日本青年団協議会会長を務めた。県社会教育委員としても活躍。「山形県海浜青年の家」「白井自然の家」初代指導員。農家として米、ヌイカ、メロン、ぶどう、なめこ、養蚕などを手がけ、現在一道の駅鳥海「てとうと」代表取締役社長。

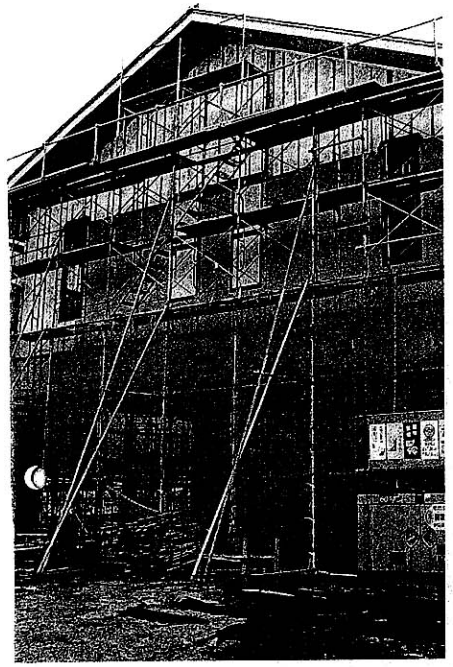
ますし、その季節の味を大事にしています。一年中、きゅうりやトマトがスーパーに並ぶのは異常です。また、農業の安全性についても疑問です。虫も食べないものは、家族にも食べさせられません。不自然なものを作らない事が、遊佐町の農業の基本だと思って作物を作っています。石けん運動やリサイクル運動を通して遊佐町の自然を守っていく。今、この時を大事にすることが子どもたちの未来につながっていくのだと思います。

町長　わが国の人口と食料に対し、古くには、米一石、人一人といわれてきました。しかし、貧しい人々はアワ・ヒエなどの雑穀が主食で、正月やお盆に白い米にありつけるかどうか、そうした飢えの現状は戦後まで続いてきた。そこからの開放、農作業などの重労働からの開放がついこの前までの課題だったのだと思います。そして、近代化の基、利便性、大量生産をめざすことがいいことだったわけです。しかし、今日その価値が大きく変化してきた。食して大丈夫なのか、という安全性やあの人が作っているからという安心、そして味を含めての本物が、今、求められているのであり、これまでの単に市場で高いからという食料生産から、安全・安心・本物に価値が変わってきた。

　農業は生命と関わって学ぶことができる職業です。いろいろな形態の農業があってもいいんじゃないかと思います。農業は、全ての人たちが生命と多面的に関われる産業です。子どもはもちろん、高齢者の人も含めて、いろいろな人たちが農業を通し、生命と関わって欲しいと思います。必ずしも大量生産ではなくて、少量多品目も必要です。つまり、それが多様性なのです。遊佐町の多様性をいかに活かしていくか。そうして、本物の個性ある地域農業を確立していきたいものです。

阿部　「ふらっと」では、この人のこの作物がいいということで探して買っていく人もいます。お客さんの中には、ここに来ると楽しいという人もいます。

町長　そうですね。生産者一人ひとりが見える。自分の存在があるそれが重要だと思います。町民主役の町づくり



改築が進む、遊佐小学校

を考える時、主役である町民は問題や課題を提起し、問題課題解決に取り組んでいかなくてはならない。そのためには自然を通じて、その関係の中から人間が見えていく。その時、人にも環境にもやさしくなれるのではないでしょうか。

髙橋　昔は、藤崎の人たちがリヤカーで遊佐に野菜を売りに来た。吹浦の人は魚を売りに来た。顔の見える取引は以前からあったんです。あの人が売りに来たから買う、つまりそれは信用なわけです。昔は川の上の方で刈った草が流れていくと、川下では拾い上げて堆肥として使っていた。今はいろいろな意味で循環のサイクルがどこか狂っている。

今、青少年ボランティアサークル「くじら」やJボランでは「歩歩歩（さんぽ）の会」と一緒に、三崎公園の三崎山の旧街道の清掃や復元をしていますが、そんな核となる地域活動も大切なのだと思います。

司会　各地区に核となる人材、環境でも自然でも農業でも達人がいるのだと思います。そんな人たちを学社融合の場で活かしていけるような仕組みが大切ですね。そのためには、「あなたしかできないから、よろしく頼む」というような頼み方、人に合わせた時間の組み方を心がけていくべきでしょう。いい例が「出前講座」です。核となる人材の掘り起こしにつながっていくのではないかと期待しています。

最後にこれからの遊佐町の教育について皆さんの意見をお聞かせください。

町づくりの原点は人づくり

町長　小学校、中学校でも取り組まれていますが、地域の人々が講師となって学校に行き、学校の先生が地域へという相互学習が大切です。その意味で県立遊佐高等学校のインターンシップの試みは評価したい。

これからは、交流人口が拡大していきます。つまり遊佐を訪ねる観光です。観光は光を観ると書きますが、その光るものとは、何なのか。

それは遊佐に住んでいる人が生き生きと自信と誇りを持ち、光っていることだと思います。生き生きと輝くためには、遊佐の持っている自然・文化・歴史などのポテンシャルを生かした取り組みが必要です。その意味で教育は町づくりの基礎です。

町づくりの原点は、人づくりであり、一人ひとりの存在と役割が見えるということです。「参加と協働、そして共生」は町民の皆さんの主体的「参加」と知恵も汗も流しあう「協働」であり、「共生」は自然との共生はもちろん、異なった人々、世代との共生でもあります。

阿部　玲子さん（京田）

昭和32年生まれ。農家（道の駅鳥海「ふらっと」野菜直販所）。月10日程度勤務。ひまわりの会会員。花や植物が好きでハーブの栽培も自らとりて者実。結婚して20年。1女3男の母。

自分たちで考え、責任を持って行動する

蕨岡小学校５年生の通学合宿

みんなで買い物

町内の6つの小学校では、今年度、4泊5日の集団研修を行うことになりました。その中で蕨岡小学校は、白井自然の家で4泊5日の通学合宿を行いました。

みんなで集団生活をしましたが、洗濯機を借り、調理ができるように台所を準備し、家での生活と同じように生活し、学校に通いました。父兄や先生は支援にまわり、できるだけ子どもたちに任せるようにしました。生涯学習課や公民館との縁で山形大学の学生には手伝ってもらいましたが。

子どもたちにとっては、自分たちだけで買い物することも初めての体験だったようですし、家庭のありがたみがわかったようです。また、自分たちで考え、責任を持って行動することを目的に行いました。

蕨岡小学校校長　松澤　一彦さん

明治以降、わが国は近代化をめざし、その行政施策は強力な官の指導の基での国づくりであり、これは今日まで続いています。ともすると民は依存体質に、官は押しつけの体質に、つながっていると指摘されています。

これからは、官はやってあげているというようなおごりの体質を捨て、主役である地域住民のための舞台をつくることを考えなければならないし、民は自発性、自立性、主体的に地域はこうしたいと提案・行動しなければいけないと思います。そのために官の持っている情報は積極的に公開し、住民と共有することことが大切です。豊かに生きる原点を求めていくためにも、人材の育成を含めて生涯学習が重要です。

私はこの頃、教育の基本として二宮金次郎が言っていることに共鳴しています。

一つ目は「分度を立てる」、これは、分をわきまえること、つまり自立した価値を持ち、遊佐は遊佐でいいじゃないかということです。2番目は「勤労すること」社会的な役割分担を持つことです。そして3番目は「推譲する」これは、他に差し出す、徳に報いること、つまり感謝を持って進んで人のために何かやることだそうです。

今、遊佐町では学校の改築を進めています。校舎が老朽化したので、改築しなければならないのですが、それを契機にして、自分たちはこの地域でどのように生きていくのか、どんな人間を育てていきたいのか、どんな人間を求めていくのか、そのために何をすべきか論議してもらいたいと思います。

髙橋　私は生命の源となる作物を作る農業こそ教育の基本だと思います。今、私は縄文時代の生活に親しみを感じます。自然から恵みをいただいて、生活するやり方もいいなあと思う。平成12年4月から、総合学習が導入されて、個性的な学習ができるようになります。それに先駆けて、山形市で公開研究集会が行われました。この中でいろいろな反省や意見が出されました。

身近にあったこの集会を踏まえて、地域の人たちが一緒になって検討され、よりよい環境教育が実践できることを期待しています。

阿部　お母さんの立場から言えば、赤ちゃんの時の親子のふれあい、子どもをだっこしたり、添い寝して本を読んであげたり、そんな一番最初の親子のふれあいもとても大事だと思います。その上にそれから先のいろいろな教育があるのですから。

司会　皆さんのお話を聞いて、教育の方針は市町村で作っていく時代になっているのかも知れないと思いました。ナンバーワンより、オンリーワンへ、自然を大事にして生かしていく価値に転換していくには、今がチャンスではないかと思います。

今日は長時間ありがとうございました。